道具や紙は勿論、無料で支給され、2個の金灯籠を半期半ばに作り上げ、そのうち1個を講習会に納め1個は自分で持ち帰って好い仕組みだった。

そして高年組で1台だったか分からないが、奉納していたようである。

こうして少年たちに灯籠の技術の手ほどきをし、同時に少年たちの胸の奥深く山鹿灯籠への愛情を刻み付けることに成功したようである。

現灯籠師の松本保氏もこの講習会で最初に手解きを受けたはずである。

と記述が有りました。

追記として

明正会が灯籠講習会を開くのに都合が良かった条件に、会員の中に多数の名人が居たことを挙げなければならない。

即ち、当時の代表的な灯籠師である中原長次郎、井口繁次、松本清記氏等が居たのである。

そして、講習会にはこの人たちが輪番で出ていたそうです。

寄贈された座敷造り灯籠は、現在も作られている二間造りの灯籠です。

おそらく商品として量産されたものだと思われます。

しかし、精密な作りと恐らく本人の手によるものと思われる襖絵など、何一つ手を抜くことのない作品は灯籠師の末端にいる者にとって大変参考に成ります。

氏の作品は民芸館別館工房で展示しています。